

三浦半島顕花物の検討 (其の二)

大 谷 茂

この報告は前報告(大谷1957)に続くもので、それ以後三浦地区で新しく発見したもの、新しい分布地のわかったものを以下各項について述べる。標本は横須賀市博物館に保管している。

1. カラタチバナ *Ardisia crispa* (THUNB.) DC. の分布

この種は常緑の小灌木で暖地の樹陰に自生し、果実は小さな球形で、赤熟し越年して尚落ちないので深緑の葉との対称がよく観賞価値も極めて高い。それ故次第に栽植され又鉢植として盛んに利用されるようになった。従って野生品が減少する恐れもある。

三浦半島では産地として逗子の神武寺が知られていた。

その後著者の調査で逗子披露山 (Nov. 19, 1952)、逗子桜山小古瀬 (May 17, 1953)、逗子万合谷戸 (Nov. 6, 1954)、三浦市初声 (June 15, 1957)にも分布することがわかった。

2. ヒトモトススキ 一名 シシキリガヤ *Cladium chinense* NEES の分布

本種の和名一本ススキの意で一株から多数の葉が出るためである。又シシキリガヤは、その葉が強靱なるためで猪切ガヤの意である。

本種は本州(相模、能登以西)、四国、九州の主として海岸に近い湿地に生ずるもので、三浦半島の自生地としては三浦半島植物誌(1950)に野比、松輪、網代、初声あげてある。著者はその後の調査で以上の地域の他に次の地点で見出している。即ち、長井の荒崎(July 27, 1951)、大楠の天神島(July 21, 1952)、三浦市昆沙門(July 24, 1953)である。

照本乗薫氏の作詩作曲になる荒崎音頭の一節に「私しゃ荒崎ヒトモトススキ 女波男波にふれて咲く」とうたわれているものである。

3. マルバマンネングサ *Sedum Makinoi* MAXIMOWICZ 横須賀に自生する

葉は対生で花序部は互生している。葉の形はヘラ形又はヘラ状狭倒卵形で扁平、肉質で、鈍頭乃至円頭である。

筆者は1953年8月27日横須賀市田戸の石崖で採集した。これが三浦地区に於ける本種の最初の記録である。

4. ウリノキ *Alangium platanifolium* HARMS var. *macrophyllum* WANGERIN 三浦に産す

本種が三浦半島に自生するか否かはこれまで疑問とされていたが、著者は1948年5月31日木古庭の畠山谷で開花した数本の灌木が溪流に沿った道の斜面に自生しているのを認めていた。再度(May 19, 1957)同所をたずねた時は多くは蕾の程度で開花しているのは少なかった。三浦地区では今のところ同所以外では見当たらない。

本種はその葉が瓜の葉に似ているのでその和名が出たのであるが種名の *platanifolium* はスズカケノキ属 *Platanus* のような葉という意味であって、変種名の *macrophyllum* は大きな葉という意味である。

長柄で広闊薄質の葉が互生して山地樹林内にひろがっている景観は実に美しいものである。又花の形が面白く、初夏の頃葉腋に花梗を出して上部が疎に分枝してその小梗端に、かなり大きな白花をつける姿態が美しい。

葉や花ばかりでなく、その果実もすてがたいもので、広楕円状球形の果実が藍色に熟して枝につ

く様はよいものである。

5. ヤナギイチゴ *Debregeasia edulis* WEDDELL を三浦に確認する

この種はイラクサ科 *Urticaceae* の植物で多くは暖地海岸に近いところに自生する草状の落葉灌木である。著者は本県では山北の平山滝（洒水滝ともいう）附近と真鶴保安林内で古くからその自生を認めておいたものである。

三浦半島植物誌（1950）に本種の記録があるが之は恐らく SAVATIER の文献に基づいたものであろう。それは古く SAVATIER が横須賀で本種を採集したという記録があるからである。然し本種が三浦地区に発見されたと言う確かなことはわかっていなかった。

著者は横須賀の猿島で、はからずも本種を確認した（June 17, 1953）。更に通称三浦富士と呼ばれている浅間山でも確認することが出来た。そこは武山から山尾根伝いに浅間山頂上を過ぎて北下浦への方向に少し下りた左側の谷である。

この種は葉が狭長でヤナギのようであって果実は粒々相集まってイチゴに似ているところからこの和名が出ているものである。この果実は柑黄色に熟して金白糖状の球形をなし枝に密集してつくもので多汁甘酸味があつて食用としてもすてがたいものである。

6. ヒメナズナ *Draba verna* LINNAEUS 久里浜に発生

著者は本種を横須賀市久里浜ペルリ記念碑地内で採集した（May 19, 1957）。*Draba* 属にまちがいがないと思ひ、靱山泰一、浅井康宏の両氏に同定を依頼したところ本種であることがわかった。

ヒメナズナは弱小なナズナ即ち姫ナズナの意で英名を *Vernal whitlow grass* といい、欧洲原産の雑草だが北アメリカを始め各地に分布しているようである。日本では牧野富太郎博士が上野公園旧皇室博物館内で、明治41年2月に採集し、ヒメナズナと命名、この標本は国立科学博物館にあるが、之が最も古い発見であらう。その後各地に点々と発見されている。松本の山崎林治氏より依頼された標本を見ていたところ、はからずも本種がはいっていたので信州松本市にも出現したことがわかった。

本種は花茎に葉をもたないことと、花卉の先端が2岐することが特徴であつて、他種との区別は容易である。

しかし本種の特徴であるところの花卉の先端が2岐するというを、余りに強調して考えると *Erophila verna* (LINN.) DHEVALL. と別の属とする見方もあるようである。

この *Erophila* 属を果実の形と果実序によって更に細分して3型があるとして、次の3種に分類している。即ち

Erophila verna,

E. spathulata,

E. praecox である。

この3種ともイギリスには路傍、原野に自生しているようである。*E. F. WARB* 氏の書物にも “*native of Europe: naturalized in field and roadside*” と述べているので普通に見られるようである。

しかし2岐花卉の深さと、果実の形とつき方によって分類されているが、このように細分することは分類学的には実にむずかしい属であると思ふ。まず変種か品種とするのが妥当のように思われる。

本種は1年生の小草木で、全株に星状毛が散生し、葉（長さ1.2cm）は根生で、数本の花茎を出し花卉（長さ2mm）は白色である。又果実（蒴）は有柄、扁平、長楕円形のものである（長さ6mm、幅3mm）。

7. オオウラジロノキ *Malus Tschonoskii* (MAXIM.) C. K. SCHNEID の新産地

本種は一名オオズミ又ヤマナンともいわれる、バラ科の植物である。

一見して極めてナシの葉に似ているものであるが、これは枝が黒紫色で若い時は帯白色の綿毛がある。葉は上面幼時は密綿毛があるが後に無毛となる。しかし下面は帯白色の軟毛がいつまでも密生している。又葉柄にも白色の綿毛がある。以上の点で区別は容易に出来る。

本種は本州の山地に生ずるものであるが、普通稍々高山地に自生する。著者はこの種を逗子神武寺山の低山地にその自生を確認したのである。同所には2ヶ所に生育している。始め発見 (Apr. 26, 1953) してから毎年開花の季節に行き見て見るが、今だに開花したものを見ることは出来なかった。

花は葉をつけた短い新枝の先端に5月頃数個開くもので、箱根辺では見事に開花した状態が見られるものである。神武寺産のもので花が見られないということは、花をつける程度に大きくなれないうちに伐採されるためかと思う。伐られた周囲から又新枝が発生している株ばかりであるところから、そんなようにしか考えられない。

8. ヌマダイコン *Adenostemma Lavenia* (LINN.) O. KUNTZE の自生

この種は菊科植物であって、葉質がダイコンの葉に似ているので、この和名がある。

著者は野比と千駄ヶ崎で之を採集 (Oct. 12, 1953) している。又檜山庫三氏によれば三崎にもあることを認めているので新産地として報告するものである。

本種は低地の河岸に多く生ずるもので、稍々湿った地や水傍や溝によくみかけられる。分布は暖帯から熱帯にわたっており、日本では本州 (中部地方以南) 四国、九州、琉球に広く見られる。

本州中部地方以南に自生するこの種が、三浦半島に自生しているということは分布上から珍らしいといわねばならない。

9. アマナズナ *Camelina sativa* CRANTZ

本種は一名タマナズナともいわれるもので1年生の草本である。茎には多少毛があり、葉は披針形箭脚で両面に毛がある。上部の葉は線形となる。花は小形で黄色。蒴は倒卵形で表面に網脈がある。

著者は本種を国鉄横須賀線田浦駅前で採集した (May 23, 1954)。

本種は歐洲原産の雑草である。我が国では亜麻畑の雑草とされているけれども、その種子の性質は亜麻によく似ていて、粘質と油とを含んでいるところから、カナダでは亜麻同様に栽培しているようである。

本種は三浦半島植物誌 (1950) に記録されていないので、ここで報告しておく。

10. カラクサナズナ *Coronopus didymus* SMITH

本種は1年生の草本で、一名インチンナズナともいう。それはインチン即ち茵陳 (カワラヨモギ) の様に細裂した葉をもつからである。

著者は横須賀市不入斗 (May 10, 1954)、及び久里浜 (June 28, 1954, July 1, 1954) で採集した。

この種は歐洲原産の雑草で帰化植物である。

本種は土質とか、季節によってその全形多少形態の異なるものが生じる。

本種は臭気があり、茎は平滑で、葉は羽裂し、その各裂片が更に浅裂する。花は極めて小さく、花弁は白色である。果実は先端凹頭の扁球形で種子の表面に、いちぢるしい網紋がある。

この種も三浦半島植物誌 (1950) には記録がされていないものである。

11. モガシー名ズクノキ (誤称ホルトノキ) *Elaeocarpus sylvestris* (LOUR.) POIR. を猿島にて採集

本種の和名モガシは薩州の方言で、この種は暖地に生ずる常緑の喬木となるものである。一見してヤマモモに近い外観を呈するが、之は葉の裏面中脈の両側、支脈腋に特殊のミズカキ膜があるので区別がつく。この種は時に緑葉中に赤変した老葉をまじえるので誠に美しいものである。

本種は古くから三浦半島では返子の神武寺境内にあるものが知られていたが、著者は之を横須賀市の猿島の洞窟付近で確認をした。神武寺のものは移植したものであるが、猿島のは自生であると思われる。この種の分布は本州では安房以西、東海道、近畿、中国であるから、この猿島に自生していても疑問とするところはない。

神武寺のズクノキは名木として柵をめぐらし標札が立てられているが、それには「銘木、樹齢4百年、ホルト樹、別名、なんじゃもんじゃ、昔ポルトガルより当山に移植せりという。」とある。この標札には困ったものである。ホルトノキはポルトガルの木すなわちオリーブの木のことで、昔オリーブの果実がポルトガルから輸入されたのでポルトガルの木と呼び又オリーブの油のことをポルトガル油と呼んでいたものである。この種の果実がこのオリーブの果実に酷似しているところから誤られたものであろうと思う。「別名なんじゃもんじゃ」というのは一向差支えないことで、之は諸地方によく見かけるものである。ナンジャモンジャの木と呼称されても地方によって、それが何という植物か、樹種は皆異なっている。古き文献では元禄時代の俳句に「下総神崎のなんじゃもんじゃの木を訪ねて」という題で、「何若葉 自問自答の ほととぎす」というのがあるから、この時代からこの言葉が生れてたように思われる。何にしても、土地の人々が郷土の名木を親しみをもって見守ったことがうかがわれるのである。

12. トリアシショウマ *Astilbe congesta* NAKAI の三浦地区の自生は疑問である

この種はユキノシタ科の植物で、北海道とか北陸地方に普通に見られるものである。本種が三浦半島植物誌(1950)に記録されているが、三浦半島に於ける自生は甚だ疑問である。

この種は小葉の幅が狭くて基部が細まって鋸歯がやや浅く、複総状花序の横枝は再分岐しないし、花序はマバラにみえるものである。

三浦地域で著者のみかけるものは、殆んどアカショウマ *A. Thunbergii* MIQUEL ばかりであった。恐らくこのアカショウマをトリアシショウマと誤認しているのではなからうか。

13. 三浦のアジサイ属 *Hydrangea* LINN. について

三浦半島植物誌(1950)の中にアジサイ属について次のような記録がある。

“*Hydrangea macrophylla* DC. var. *normalis* f. *azisai* WILSON ガクアジサイ猿島、観音崎” 著者はこの学名並びに記述を次のようにするのがよいと思うので訂正したい。

“*Hydrangea macrophylla* SERINGE ガクアジサイ var. *normalis* WILSON ハマアジサイ、猿島、観音崎” このハマアジサイは猿島や観音崎等にみられるものである。

Plate I の説明

- Fig. 1. カラタチバナ *Ardisia crispa* DC. (神武寺)
 Fig. 2. ヒトモトススキ *Cladium Chinense* NEES (長井一荒崎)
 Fig. 3. マルバマンネングサ *Sedum Makinoi* MAXIM. (横須賀一田戸)
 Fig. 4. ウリノキ *Alangium platanifolium* HARMS var. *macrophyllum* WANGERIN (畠山谷)
 Fig. 5. アマナズナ *Camelina sativa* CRANTZ 果実序一部拡大 (横須賀一田浦)
 Fig. 6. オオウラジロノキ *Malus Tschonoskii* C. K. SCHNEID (神武寺)

Plate II の説明

- Fig. 7. ヒメナズナ *Draba verna* LINNAEUS (横須賀一久里浜)
 Fig. 8. ヒメナズナ *Draba verna* LINNAEUS の花茎一部拡大 (久里浜)
 Fig. 9. スマダイコン *Adenostemma Lavenia* O. KUNTZE (横須賀一野比)
 Fig. 10. カラクサナズナ *Coronopus didymus* SMITH (横須賀一久里浜)
 Fig. 11. ヤナギイチゴ *Debregeasia edulis* WEDDELL (横須賀一猿島)
 Fig. 12. モガシ一名ズクノキ *Elaeocarpus sylvestris* POIR. (横須賀一猿島)

文 献

- 大井 次三郎 1953. 日本植物誌: 218, 443, 591, 595, 611, 665, 764, 813, 911.
 久内 清孝 1950. 帰化植物: 121, 123, 125.
 増島弘行, 石渡治一. 1950. 三浦半島植物誌: 横須賀市史 6, 27, 33, 34, 35, 42, 44, 47, 55, 65.
 CLAPH., A. R., T. G. TUT. & E. F. WARB. 1952. Fl. of the British Isles: 200.

Résumé

Some Notes on Flowering Plants of Miura
Peninsula, Japan (Report II)

Shigeru OHTAN,*

(With 2 Plates)

The following Species of Flowering Plants have been collected in the Miura area since publication of the author's last article "Some Notes on Flowering plants of Miura Peninsula, Japan" in March, 1957: *Ardisia crispa*, *Cladium chinense*, *Sedum Makinoi*, *Alangium plataniifolium*, *Debregeasia edulis*, *Drava verna*, *Malus Tschonoskii*, *Adenostemma Lavenia*, *Camelina sativa*, *Coronopus didymus* and *Elaeocarpus sylvestris*.

The "Florula Miurensis" (1950) reported *Astilbe congesta* NAKAI to be located in the Miura area, but the author's survey of this area revealed no traces of this species.

The classification of the following fern species, listed in the Florula Miurensis, should be corrected as follows: *Hydrangea macrophylla* DC. var. *normalis* f. *azisai* WILSON to (*Hydrangea macrophylla* SERINGE var. *normalis* WILSON).

Most of the above mentioned specimens are to be found in the herbarium of the Yokosuka City Museum.

*Yokosuka City Museum and Zushi Junior High School.



Fig 1. カラタチバナ *Ardisia cr. sba* DC.



Fig. 2. ヒトモトススキ *Cladium chinense* NEES

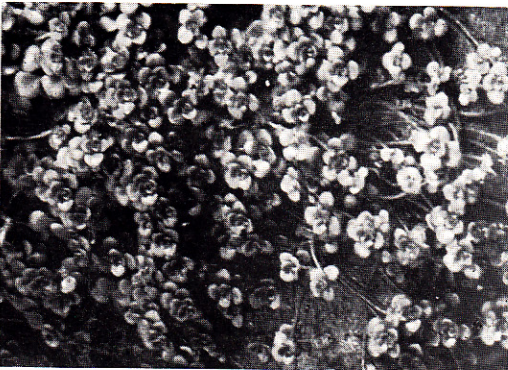


Fig. 3. マルバマンネングサ *Sedum Makinoi* MAXIM.

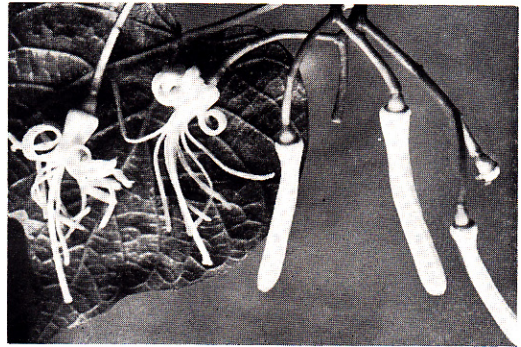


Fig. 4. ウリノキ *Alangium plataniifolium* HARMIS.
var. macrophyllum WAGERIN

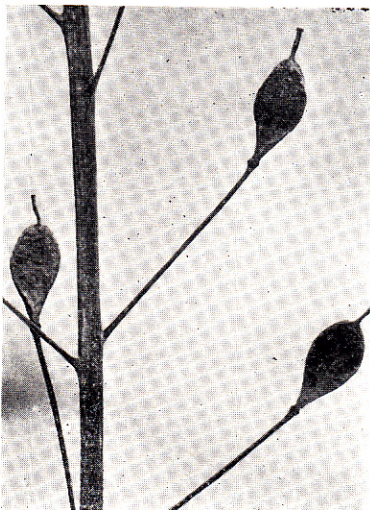


Fig. 5. アマナズナ *Camelina sativa* CRANTZ

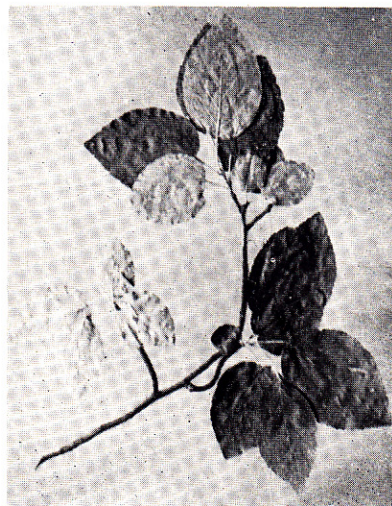


Fig. 6. オオウラジロノキ *Malus Tschonoskii*
C. K. SCHNEID



Fig. 7. ヒメナズナ *Draba verna* LINN.

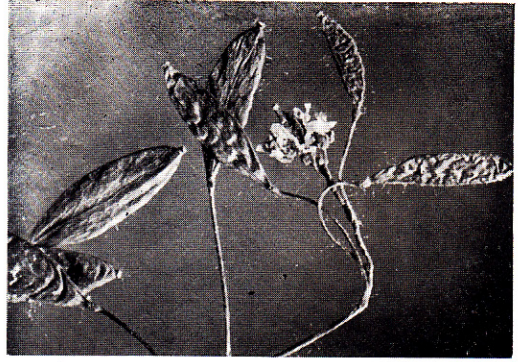


Fig. 8. ヒメナズナ *Draba verna* LINN. の花茎一部拡大



Fig. 9. スマダイコン *Adenostemma lavena* O. KUNTZE



Fig. 10. カラクサナズナ *Coronopus didymus* SMITH



Fig. 11. ヤナギイチゴ *Debregeasia edulis* WEDDELL



Fig. 12. モガシ一名ズクノキ *Elaeocarpus sylvestris* POIR.